

学校評価の三ヶ年（平成 23 年度～平成 25 年度）の変遷

2014. 4. 3

	平成 25 年度	平成 24 年度	平成 23 年度
1. 評価の仕方について	<p>全教員を対象に学校自己評価と中期目標中期計画・学校づくりビジョンに関わる評価を実施した。学校自己評価と中期目標中期計画については、まず全教員がそれぞれに評価し、その結果をふまえて部会で本年度のそれぞれの活動の総括を行った。23年度より本校のめざす子ども像や学校教育目標へ近づかための「学校づくりビジョン」「努力指標と数値」を示したので、これの関連も踏まえた評価とした。</p>	<p>全教員を対象に学校自己評価と中期目標中期計画・学校づくりビジョンに関わる評価を実施した。学校自己評価と中期目標中期計画については、まず全教員がそれぞれに評価し、その結果をふまえて部会で本年度のそれぞれの活動の総括を行った。昨年度より、本校のめざす子ども像や学校教育目標へ近づかための「学校づくりビジョン」「努力指標と数値」を示したので、これの関連も踏まえた評価とした。</p>	<p>全教員を対象に学校自己評価と中期目標中期計画・学校づくりビジョンに関わる評価を実施した。昨年同様、学校自己評価と中期目標中期計画については、まず全教員がそれぞれに評価し、その結果を踏まえて部会でまとめを行った。なお、本年度から本校のめざす子ども像や学校教育目標へ近づかための「学校づくりビジョン」を示したので、これの関連も踏まえた評価とした。</p>
2. 評価全般に関わって	<p>学校教育活動全般において、多くの教員が昨年度同様、比較的満足度の高い取り組みを行うことができた。本校の責務である研究に関して、本年度は研究が4年次の総括ということもあり、教員一人一人が課題を持ってそれぞれの教科で取り組んだ。また、すべての教科で三重大学学部教員を助言者として迎えるなど、昨年度よりも学部・附属との間で研究における連携を充実させるべく取り組んでいる。</p>	<p>学校教育活動全般において、多くの教員が昨年度同様、比較的満足度の高い取り組みを行うことができた。本校の責務である研究に関して、教員が自分なりの課題を持ってそれぞれの教科で取り組み、また、昨年度よりも大学の学部教員との間で研究における連携を充実させるべく取り組んでいることをうかがうことができる。さらに、大学に附属との連携室ができたことにより、教育実習において成果を上げている。</p>	<p>学校教育活動全般において、多くの教員が昨年度同様、比較的満足度の高い取り組みを行うことができた。昨年度、学校づくりに向けて3つの見直し（入学式・卒業式のスタイル変更、家庭訪問から個別懇談会への転換、新入見選考時期の見直し）を行ったが、保護者にも理解の得られたスムーズな学校運営ができた。これは、思い切った慣習の見直しや会議の精選、県教委等との連携の在り方の見直しなど、教員が少しでも本務に専念できる環境づくりへ向けてさまざまな条件が整えられてきていることを示すものであると考える。もちろん、教員一人ひとりの意欲と努力に負うところが大きいと思うが、今後も改善点を見つけて、ビジョン達成へ向けた学校づくりをめざしていきたい。</p>
3. 学校運営について			
(1) 成果	<p>昨年度同様、校内評価委員会を設置し、年度初めに中期目標中期計画・学校づくりビジョンについて検討し、ビジョンの重点目標を努力指標と数値化して具体的に示すことができた。また、本年度の学校運営の方向性について教員に明らかにするとともに、HPや育友会総会等で示し、保護者への情報公開も実施できた。評価委員会では、それぞれの担当が校務分掌での推進を図るとともに、年度末の総括について話し合う等、機能的に業務を推進できた。</p>	<p>本年度は、校内評価委員会を設置し、年度初めに中期目標中期計画・学校づくりビジョンについて検討し、ビジョンの重点目標を努力指標と数値化して具体的に示すことができた。また、これら本年度の学校運営の方向性について教員に明らかにするとともに、HPや育友会総会等で示し、保護者への情報公開も実施できた。評価委員会では、それぞれの担当が校務分掌での推進を図るとともに、年度末の総括について話し合う等、機能的に業務を推進できた。</p>	<p>大学や四附属の教育目標との関連を考えた教育活動の根幹となる「学校づくりビジョン」をHPや育友会総会等で示したことにより、本校の目指す学校運営（管理、育成、指導）の全体像を明らかにすることができた。また、これらを踏まえた分掌事務の推進が組織として少しずつ機能してきている。</p>
(2) 課題と今後に向けて	<p>本校では、教育実習、新入見選考など行事も多く、かつ保護者のニーズの多様化により日々多忙化している。年度当初のベースプランにより、各行事を無駄・無理のないように見直しを持って計画・実施するとともに、実</p>	<p>本校では、教育実習、新入見選考など行事も多く、かつ保護者のニーズの多様化により日々多忙化している。年度当初のベースプランにより、各行事を無駄・無理のないように見直しを持って計画・実施するとともに、実</p>	<p>学校教育目標を、全ての教育活動の根幹に位置づける「学校づくりビジョン」を示すことはできたが、ビジョン達成へ向けての分掌事務組織の在り方や各分掌事務担当者が、達成へ向けてどのような取り組みをすべきか、そ</p>

	<p>施後の反省を共有し、次の行事や次の年度に生かし効率的な学校運営をめざしていく必要がある。また、来年度は本年度の総括を踏まえ、学校運営におけるビジョンの見直しを行う。主なものとして、連携一貫教育の導入があげられる。四附属間での連携の取り組みが充実し実のあるものになるよう立案し実行していく必要がある。</p>	<p>施後の反省を共有し、次の行事や次の年度に生かし効率的な学校運営をめざしていく必要がある。また、学校の課題を教員が共有するために、各分掌の情報交換が密になるような教員会議の工夫や分掌担当者の連携が必要である。</p>	<p>の手法を明らかにし年間計画へ位置づけることなど、まだまだ多くの課題がある。ビジョン達成へ向けての取り組みは極めて総合的なものであるだけに、使命である研究や実習を薄めることなく、充実したものにながら全ての教育活動がいかに機能できるかを模索していかなければならない。このビジョンを推進していくのが運営委員会であり、運営委員会の考え方を受けて各委員会や分掌事務担当が立案し実行していく必要がある。</p> <p>そのためには、運営委員会の見直しや分掌事務の見直し、勤務状況の見直し、会議の精選など、思い切った改善も必要であろうと思われる。また、一人ひとりが学校運営の主体者となり、組織的な取り組みのできる体制を整えていきたい。さらに、教職員間や保護者との相互理解、信頼関係に基づいた教育活動が行えるよう、一人ひとりの思いや考えを尊重し合う人間関係づくりを今後も一層心がけていきたい。</p>
<p>3. 研究・実習・地域貢献について (1) 成果</p>	<p>本年度は、年度当初に3年次までの研究の成果と課題を踏まえた研究の方向性を示し、全体での「一人ひとりがわかる」を議論し、<わかる>を捉え直した。研究の全体については、専門的見地からの意見も参考にするため、大学との連携を図った。その結果、全体の研究テーマである「一人ひとりがわかる」子どもの状態を教科での姿として明らかにするとともに、それに迫る教科の研究を計画的かつ論理的に進めることができ、結果として、高い評価となっている。教員一人一人が意欲を持って本校の使命を遂行していることがうかがえる。さらに、実習については、大学連携室との連携を密にし、学生への指導・支援において効果を上げている。なお、初任者研修の会場校として全クラスの授業を公開していることは地域貢献の一助となっているといえる。</p>	<p>本年度は、年度当初に研究の方向性を示し、各教科で目指す子ども像について協議した。また、研究の全体については専門的見地からの意見も参考にするため、大学との連携を図った。その結果、全体の研究テーマである<わかる>子どもの状態を教科での姿として明らかにするとともに、それに迫る教科の研究を計画的かつ論理的に進めることができ、結果として、高い評価となっている。一人ひとりが意欲を持って本校の使命を遂行していることがうかがえる。さらに、実習については、今年度から始まった大学連携室との連携により、学生への指導・支援において効果を上げることにつながっている。なお、初任者研修の会場校として全クラスの授業を公開していることは地域貢献の一助となっているといえる。</p>	<p>研究テーマを受けて各教科・各自課題を持った研究活動、意欲と情熱を持った学習指導、教材の精選・工夫、等、高い評価となった。一人ひとりが意欲と自信をもって本校の使命を遂行していることを伺うことができる。</p>
<p>(2) 課題と今後に向けて</p>	<p>研究活動においては、来年度、4年間の総括を踏まえ、新たな研究の方向性を明らかにしていく。そのために、本校児童の姿をより具体的に分析し、めざす子ども像に向けての授業のあり方を改めて捉え直し、授業研究をより内容の濃いものとするための研究の方策について吟味する必要がある。今後、教育研究活動を通して県下のモデル校となってい</p>	<p>研究活動においては、本校職員の意欲的な姿が見られたが、来年度は4年次で研究の総括の年度でもある。公開研究会のあり方をはじめ、研究の総括が4年次としてふさわしい内容の濃いものとなるよう、研究の方策について吟味する必要がある。また今後、教育研究活動を通して県下のモデル校となっ</p>	<p>研究活動については、本校職員の意欲的な姿を垣間見ることができるが、研究が4年次という長期に亘るため、展望を持った取り組みをせねばならず、教職員の異動により新たに転入をした教員へのオリエンテーションや協力など、各教科や研究の協調体制も要求される。</p> <p>教育実習の在り方については、より充実した</p>

	<p>くためには、日常的に公立校と連携を深めていくための施策も模索していきたい。</p> <p>教育実習においては、様々な価値観を持った学生に対応するためにも、大学連携室との連携をより一層密にし、より質の高い実習を行う必要がある。そのために、教育実習の予算の確保は急務である。</p> <p>子どもを取り巻く生活環境、保護者の価値観はますます多様化しており、本校の教育的活動や使命について、より啓発していく必要が増している。教員・子ども・保護者の人権意識を高めることが不可欠であり、人権学習の充実が急務である。学年に応じた人権学習について、年間を通して立案し実施するとともに、実施した内容について交流し全体で共有する取り組みを進めていく。また保護者に向けては、人権担当を中心に、年1回行われる人権参観の学習内容や懇談会の持ち方について検討し発信していきたい。</p>	<p>ていくためには、日常的に公立校と連携を深めていくための施策も模索していきたい。</p> <p>教育実習においては、様々な価値観を持った学生がいることも否めず、本年度成果をあげている大学連携室との連携をより一層密にし、より質の高い実習を行う必要がある。そのために、教育実習の予算の確保は急務である。</p> <p>子どもを取り巻く生活環境、保護者の価値観はますます多様化しており、本校の教育的活動や使命について、より啓発していく必要が増している。また、一部ではあるが、保護者の本校の連絡進学理念を無視するような行動が見られることも事実である。日頃から保護者の参画する育有会活動や役員を通して保護者の声を吸収してはいるが、学級や学年担任を初め、管理職を交えた面談等で保護者の願いを知るとともに、保護者との人間関係を密にし、互いの信頼関係を高めていくことは大切である。さらに、担任が問題を一人で抱え込むのではなく各学年間・管理職・専門的な見解としてスクールカウンセラーの積極的な参加など、学校全体での連携も進め対応していくことが肝要である。なお、人権関係への取り組みを年1回授業公開、懇談会という形で行っているが、保護者の参加が非常に少ないことも問題としてあがっている。地域の学校ではないため、保護者同士のかかわりが薄いことは否めないが、今後は人権担当を中心に学習内容や懇談会の持ち方について検討していきたい。</p>	<p>成果をあげるものにしていくため、1年から4年まで系統だった実習の在り方や9月いっぱい4週間実習を終えるなど、大学側から提案されているが、本校の実状を十分に踏まえた上で、実習委員会や学部附属の連携会議の中で協議し、より良い実習の在り方を検討していきたい。</p> <p>生活環境や考え方も、変化している保護者とかかわりについては、日頃から学級や学年担任をはじめ、担当者や管理職が電話や面談等を通して保護者の願いを知り、応えていく努力を重ねている。しかし、一部ではあるが保護者の思い通りにならなければ、強要へと変化していく姿のあることも事実である。家庭訪問がなくなっただけに、普段からの会話や日記等を通して、子どもをまるごと把握する努力を続けるとともに、保護者との人間関係を深めるため連絡を密にし、互いの信頼感を育んでいきたい。保護者とのような関係を築きたいかをきちんと構想して冷静に誠実に対応していきたい。なお、人権関係への取り組みについては、他に比べて低い数値となっている。地域性がないため教科研究を中心とした本校においては、教科を通じた人権教育に力を入れ、橋北地区での人権授業の公開や津市人権協への参加など、地域への協力体制をとっているが、今後は人権担当を中心に踏み込んだ教材の位置づけなど検討していきたい。</p>
<p>4. 特別活動・学級づくり・生活指導</p> <p>(1) 成果</p>	<p>めざす子ども像に向けて、全校集会、各委員会活動等を子ども中心の活動として充実させた。各担任が授業を通して学級づくりに努力している。</p>	<p>目指す子ども像に向けて、全校集会、各委員会活動等を子ども中心の活動として充実させた。各担任が授業を通して学級づくりに努力している。</p>	<p>めざす子ども像に向けて清掃活動を中心とした生活指導や生徒指導に努めた。</p>
<p>(2) 課題と今後の取り組み</p>	<p>校外の本校児童の課題に対する対応を迅速に行うことが必要である。児童の課題も多岐にわたるため、各学年間・管理職・専門的な見解としてスクールカウンセラーの積極的な参加や増員についても検討し、対応していくことが肝要である。生活指導に関しては、担当による状況把握と早急な対応を行うようにしていく。そのために、毎月生徒指導委員会を持ち児童の課題を把握するとともに、課題を全教員が共有し報告・連絡・相談</p>	<p>校外の本校児童の課題に対する対応を迅速に行うことが必要である。そのために、生徒指導に関するシステムについて組織や対応の仕方について見直す必要がある。例えば、毎月生徒指導委員会を持ち、児童の課題を把握するとともに課題を全教員が共有し報告・連絡・相談をより密にしていくなど、予防を目的とした積極的な生徒指導の姿勢が必要である。</p>	<p>児童間の人間関係を深めていくために、今まで以上に民主的に開かれた学級や仲間づくりが要求される。特に本校には児童会がないため委員会やクラブ活動などの特別活動を充実させるとともに、問題行動への対応を迅速にするため生徒指導体制の充実も図りたい。</p>

	をより密にしていくなど、予防を目的とした積極的な生活指導の姿勢が必要である。		
5 連携 (1) 成果	本年度は連携授業として、多様な内容・形態での授業が実施され、計画的・組織的な実施や新たな内容等、改善が図られている。特に教科によっては、継続的に大学との授業作り向上に向けて取り組んでおり成果を上げている。	職員の育友会活動への参加は多く、また、本年度は研究における大学連携、および教員個別の連携授業も昨年度よりは増加し、大学との連携は深まってきている。	職員の育友会活動への参加は多く、大学との連携活動も深まりつつある。
(2) 課題と今後の取り組み	四附属間の交流は本校だけで取り組める課題ではなく、今後も四附属で取り組みの方策について検討していく必要がある。来年度は、四附属間での連携一貫教育がスタートすることもあり、附属学校と大学との連携の内容や方策について吟味し推進していく。	四附属間の交流は本校だけで取り組める課題ではなく、今後も四附で取り組みの方策について検討していく必要がある。大学連携に関しては、単発的な授業のみのかかわりだけではなく、日常的なかかわりや授業での教材の単元全体へのかかわりなど、長期的なビジョンを持って取り組むための方策について検討していきたい。	附属間交流の充実発展は大きな課題となっているが、各校園日常の忙しさのため、各校園の交流部会等の連携会議への参加もしにくい状況となっている。何をスクラップしていくか等、一步踏み込んだ検討をしていきたい。
6 教育環境等 (1) 成果	津市の避難所としての役割も担う体育館の改築が実施され、下水道設備の修繕についても大きく前進した。また、プールの機械室設備についても今後計画的に行っていく方向である。	体育館の改築、図書館の整備については大きく前進した。また、芸術棟や1階排水マスに関しても今後計画が予定され、少しずつ改善されてきている。	施設、設備の点検管理や個人情報の安全管理へ向けた整備を適切に行うことができた。
(2) 課題と今後の取り組み	児童の教育効果を向上させるために、パソコン室や図書室、特別教室の学習環境としての設備・整備について、教科担当主導で計画的に提案・実施していく必要がある。特に、プールの全面改修については大学側と協議し進めていく必要がある。また、食の安全性をめぐした給食室の改築も計画的に行っていく必要がある。	児童の教育効果を向上させるために、パソコン室や図書室、特別教室の学習環境としての設備・整備について、教科担当主導で計画的に提案・実施していく必要がある。特に、パソコン室のLAN配線、印刷機との接続は急務である。また、教員会議等のペーパーレス化についても将来的に考えていく必要もある。	昨年同様、消耗品の補充や整理等についての要望意見を垣間見ることができる。教育活動を円滑に進めるために、要望に応じた消耗品をはじめとする事務用品の整備に心がけた。ただし、必要なものを最小限大切に使い、環境への配慮をすることは、大切なことである。本年度は寄付されたB4やB5の用紙を活用し用紙代の節約を図れたが、情報機器活用によるペーパーレス化の推進など、よりよい学習環境や教材開発、会議を心がけつつ、環境への配慮も忘れないよう、努力を重ねていきたい。